

<創作>去りゆくものの碑に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: あぜごの, まん メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4535

去りゆくものの碑に

あせごのまん

一

「おや、ここに何かあるぞ」

声につられて見上げると、父の目が宙を見据えていた。目線の先にははるかな水平線が広がっている。しかし、父の目はその向こうにあるハワイやアメリカ、いや、もっと遠くの、亮介の知らない彼方の世界を見ているようにも思えた。

「いや、何もないと言った方がいいのかな？」

そう奇妙なことを呟いて、父はスッと手を伸ばした。そこにある何かをつかもうとする動きだった。

一瞬、父の指先だけスパッと切り取られたように空中に消えた。

亮介は驚いて、父の顔を見た。

「亮介、何だろうな？」

そう問いつつも、父は息子の顔に目をやろうともせず、一心に

目の前にある空間を見つめている。一度どこかへ消えた指先はもとに戻っていたが、父の異様な目の輝きに、亮介は得体の知れない怖ろしさを感じた。

「お父ちゃん、もう行こう」亮介は父の上着の裾を引っ張った。

「お母ちゃん、待ってるよ」

振り向くと、連なる巨岩のはるか向こう、売店の前のベンチに腰かけて、二人の方へ顔を向けている母の姿が小さく見えた。

「妙だな。確かに何かがあるんだけど、でも、何もないんだ」

父はすでに切り立った断崖の先っぽに立っている。そこからさらに身を乗り出そうとしていた。

「お父ちゃん、危ないよ！」

亮介は足が竦んで動けなかった。怒ったような声で言うのが精一杯だった。

常時吹きつける強い潮風によって削られた岩の頭に、父はふいと左足を乗せる。

湿り気をたっぷり含んだ海からの突風がびゅんと吹き過ぎた。父の身体はぐらりと傾いたが、危うくバランスを取って踏み止まった。にもかかわらず、次の瞬間、父は海の彼方のはるかな世界へ向け、歩き出すかのように、右足を何もない空間へと踏み出した。

亮介は声を出すこともできず、息を飲んで見ていた。

父は空中でスッスツと二、三步足を動かし、そのまま姿を消した。まるで何もない空中に溶けたとしか思えない消え方だった。

「お、おお、おとう……」言葉にならなかった。

「亮介？ どこだ？」

息子を呼ぶ父の声は風に吹き飛ばされた。

「お父ちゃん！」一言だけ叫び、後はただ言葉にならずガクガクと顎を動かすだけだった。膝から力が抜け、岩の上に座り込んだ。

「誰か落ちたぞ！」人が集まってきた。

「どこだ？」

「見えるか？」

「船を出せ！」

幾つもの声が交錯する。

慌ただしく動き回る人々の足下で、亮介は声も出せず、ただ震えながら座っていた。

*

まったく突然に、世界は闇に包まれた。

前後の状況から考えれば、自分は崖から転落したということになるのかもしれない。しかし、スーッと下から冷たい風が這い上がってくるような、あの落下の感覚はなかった。トンネルか洞窟かの入り口を潜ったような、明るい場所から暗いところへ入ったという、それだけの感覚しかなかった。

背後を振り返った。

立っていたはずの断崖はなかった。遠くに見えていた売店や、周囲の人影も見えない。

「亮介」

息子の手が上着の裾をつかんでいたのは覚えていた。まさか、自分が引きずる形になって、息子だけが海に転落したのでは……。

(おとう……)

「亮介？ どこだ？」

(お父ちゃん……)

どこかで微かな声が答えた。

落ちてはいない……ホッと胸をなで下ろしたが、その息子の姿もどこにも見えない。

今入ってきたはずの入り口さえわからなかった。前後にも左右にも、暗闇が広がっているばかりだ。

暗い。洞窟かどこかに入ったようだ……。

どこかで人々のざわめくような声が聞こえた。

声がしたと思いき方向へ足を踏み出す。しかし、何かを踏んでいる感触はなかった。前に進んでいるのか、その場で足踏みしている

だけなのか、それすら定かではない。

全てが闇の中だった。一条の光すら射してはこない。

手で探って見ても、指先に触れるものは何もなかった。

そんな馬鹿なことがあるはずはない。今の今まで、自分はあの切り立った絶壁の先に立っていたのだ。やや波濤の目立つ海の上に、午後のまぶしい光がキラキラと反射していた。海からの冷たく湿った風が時折強く吹きつけ、ともすれば人々は帽子を押さえ、上着の襟を掻き合わせていたではないか。

あの人たちはどこへ消えたのだ？ そびえ立つ岸壁は、海を行く小さな漁船は、展望台のある売店は、どこへ行ってしまったというのか。亮介は、里子は、自分がいた世界は、一体どこへ消えたのだ？ 頭の上に空はなく、足の下に地面はなく、目の前に海はない。あるのは、ただ茫漠と広がる果てのない暗闇ばかりだ。

一体何が起ったというのだろうか？

あの時、自分は目の前に不意に現れた奇妙なものに気を取られた。平面的でありながら無限の奥行きを伺わせる、周りの景色から切り離されながらも絶妙にそこに溶け込んだ、あの物体とも空間ともつかぬ不思議なものに惹きつけられた。

指を伸ばすと、一瞬ビリビリと電気が走ったような感覚に襲われたが、それも慌てて手を引っ込めるといっほど強いものではなかった。あの瞬間、不意に風が吹きつけ、小さな穴のように見えていたその何かが、大きく膨らんだ。まるでそこを潜るのが当然とでも言い

たげに、スーッと口を開いたのだ。そして、自分は迎えられるように踏み出した。

恐怖は感じなかった。海に落ちるといっ懼れもなかった。ただ何となく確かめたかっただけなのだ。それが何なのかを。

世界は一瞬で闇に呑まれた。今、自分はなにもない真っ暗な空間に、ポツカリと浮かんでいる。ここには地面どころか、空も海も、視界を遮る何のものもない。いや、自分の目が開いているのかすらわからない。

もしかししたら、これが死というものなのかもしれない。自分はあの切り立った崖から落ちてしまい、すでに死んでいるのかもしれない。だとすれば、死とは何と孤独なものなのだろう。

不意に何かが聞こえた。

(奥さん、しっかり……)

ラジオが混線したかのようなざわめきだが、闇のどこかであぶくのごとく湧き、風に飛ばされたように一瞬で消え去った。

「里子！ 里子、いるのか！ どこだ？」

しかし、答える声はなく、また耳の痛くなるような静寂が戻ってきた。

やみくもに数歩歩いてみた。が、足の裏は何も捉えず、果たして自分が移動しているのかどうかさえわからない。いくら焦って足を速く動かそうと、闇の密度に何の変化も現れない。ただのっぺりと重い暗闇がどこまでも広がっているだけだ。

もはや自分が来た方角すらわからない。上を向いているのか下を

見ているのか、横へ動いたのか後ろへ進んだのか、全ての方向が失われてしまった。

ただ完全な暗黒だけが自分を包んでいた。

*

空に消えたのだと言いつ張る亮介の主張は、誰にも取り合ってもらえなかった。遠くからだが確かに成り行きを見ていたはずの母ですら、崖の下方で寄せては返す波の面にばかり目を向けていた。

心のどこかで亮介は、父が「おい、待ったか」と、すぐにもそこから出てくるのではないかと思ってみた。しかし、父はいつまで経っても現れず、人々の動きは慌ただしさを増すばかりだった。

亮介はポツンと取り残され、母は狂ったように夫を呼び続けている。た。

やがて人々が騒ぎ合う中、母が崖の上に崩れるようにうずくまり、救急車で運ばれていった。

亮介は限りなく孤独の中で立ち竦んでいた。

搜索は丸三日間続けられたが、結局、父の遺体は見つからなかった。

棺には父の愛用の品が詰められ、荼毘に付された。

亮介はしばらくの間、祖父母の元に預けられることになった。アポロ八号が地球に送って寄越した月面の映像をテレビで見たのも祖

父母の家の居間であったし、人類が初めて月を歩く映像を見たのも祖父母とともに食卓を囲んでいた時だった。夏の甲子園決勝で松山商業と三沢高校が史上初の引き分け再試合を演じた日に、亮介はようやく母の暮らすアパートへ引き取られていった。

二一

海からは穏やかな風が吹いている。

里子は髪の毛をなびかせ、片手で大きく花束を振り投げた。亮介も做って花束を放る。二つの花束は風に煽られながら、切り立った断崖の向こうへ消えた。

（早いものね。あなたがいなくなってもう一年が経ったなんて）

隣で手を合わせる亮介に目をやる。

（この子もこんなに大きくなりました。もう小学一年生だものね。あ、そうそう、私、髪の毛切ったの。お菓子工場に就職したのよ。誰でも知ってる大きな工場。頑張って亮介を育てなくちゃいけないからね）

里子が義父母の元からようやく亮介をひきとったのは、夏休みも半ばを過ぎた頃だった。二人には反対され、一緒に暮らすよう説得されたが、それは最後の選択肢に取っておきたかった。取り敢えず母子二人で暮らしていける目途がついた今は、どうにかやってみてみたかった。

それからさらに半年以上が経ったが、夫の遺体が上がったとの連

絡は、結局届けられることはなかった。亡骸がないままの葬儀だったからか、亮介には父の死んだことが実感できないようだった。今でも時折、何かの折にふと顔を上げては、キョロキョロと辺りを見回し、「お父ちゃん」と小さく呟いていることがある。

「どうかした？」

里子の問いに、亮介は真剣な表情で答える。「お父ちゃん、生きてるよね」

そう問われて、里子はいつも言葉に詰まる。死の意味を、人はいくつくらいから理解できるようになるのだろうか。里子自身、未だに「ねえ」と呼びかけて、その相手のいないことに打ちのめされることがある。

しかし、亮介の場合、そういう喪失感を持っているわけではなさそう。かといって、幼い子供が父親の死を理解できず、永い出張にでも出ていると思っているような、そういう不在の感覚でもなさそうなのである。

戸惑う母親に対して、息子は淀みなく応える。「まだあそこにいるよ、きっと。あの時と同じようにずっと僕を捜してる」

遺体を目にするのがなかったから、未だ死の意味を把握できないということはあるだろう。その人がもう一度と起き上がらず、二度と口をきくこともなく、二度と暖かい手で抱いてくれることもない、という事実は、冷たくなった遺体を前にして初めて実感できるものなのかもしれない。しかし、里子には、お前の父親は二度と帰っては来ない、という事実をうまく亮介に伝える手段がなかった。

「もう一年になるわね。行ってみようか」

夫の消えたあの場所へ行けば、亮介も父がいなくても納得できるだろう。あの場所で父が自分を呼び続けているなどと言うことも、もうなくなるはずだ。

里子は息子の手を引いて、K本線に飛び乗ったのだった。

崖の向こうに消えた花東に、亮介は父親の死を実感できたのだろうか？

両手を合わせ目を閉じて潮風に吹かれていると、夫との想い出が次々と浮かんでくる。

オートバイで行った四国への新婚旅行。オートバイの新婚旅行なんて前代未聞だと誰もが驚いた。危ないから気をつけてと、会う人皆から言われた。心配は当たって、雨の降る山道で前輪を取られて転倒した。でも、痛くなんかなかった。泥まみれの顔を見合わせて、二人で大笑いしたくらいだ。到着を待っていた旅館の女将さんはずいぶん驚いてらした。暖かいお風呂が冷えた体を解してくれて、私、あの時本当に幸せだったって、今になって思う。

私が産気づいた時、近所の人が止めるのもきかず、あなたは荷台に私を乗せて病院まで走った。よく途中で産まれなかったものだ。救急車なんかよりずっと安全で速いんだ、なんて言っていたけど、実は、財布も免許証も忘れていたのだった。後からお義母さんに病院まで持ってきてくれるよう電話したのだそう。結局、一番慌てたのは、あなただったのかも。

覚えているかしら、あなた、よく亮介をオートバイのタンクの上に座らせて、近所を走り回っていたの。時には、私までが荷台に乗って親子三人で。亮介が大きくなったら、オートバイで旅行に行くんだ、なんて言っていた……。

あなた、取材にもよく単車で行ったわよね。さすがに東京オリンピックの聖火ランナーと併走して記事を書くという案は、支局長に却下されたらしいけど。

あなた、怒らないでね。オートバイ、売ってしまったの。ごめんない。

想い出のいっぱい詰まったオートバイだったけど、しかたなかった。だって、私には乗れないし、亮介が免許を取る頃には、錆びて動かなくなってしまうから……。

でも、ヘルメットはまだ置いてあるわ。なんだか捨てるに忍びなくて。単車のように邪魔になるものでもないし。

亮介がそれを時々取り出して被ってるの。冗談で、ほら三億円犯人、なんて言うのよ。

あ、三億円事件といっても、あなた知らないわよね。去年の十二月、東京府中で三億円が奪われた事件。私のお給料から見れば、気の遠くなるような金額だわ。でもね、社長さんのお話だと、このお金は使えないんですって。番号が控えられていて、使うとそこから犯人だとわかってしまうらしいわ。あら、本当はこういうのは内緒にしておかないといけないのよね。その犯人のモニタージュ写真っていうのが公開されたの。それが白いヘルメットを被っていたのよ。

一頃、新聞はこのニュースばかりだった。あなたが生きていたら、どうしただろう。いても立ってもいられず、東京までオートバイを飛ばしたかもしれない。新聞記者としてこんな大きな事件に巡り会うことなど、生涯に何度あるかわからないしね。

三億円を奪った犯人は、まだ捕まらないのよ。どこでどうやって生きているのでしょうか。三億円といたら、大変な荷物でしょうに。そんな大きなものを抱えて、どこへ行方をくらましたんでしよう。まるで、この世から消え去ったみたい。あなたのように……。

いいえ、消えたんじゃない。あなたは……亡くなったのよね。でも、亮介にはそれが理解できないの。まだあなたがこの場所にいると言っているのよ。

人は死ぬものなんだということを、どうやってあの子に教えられるのでしょうか。

あなたにそれを教えてあげると頼むのは、我ながら矛盾してると思う。あなたがもし今あの世から話しかけたらしたら、それこそ死というものがあの子には理解できなくなってしまうわ。ここに来れば、あなたがもうこの世にいないことが、亮介にもわかるかと思っただけのもの。けれど、私自身、まるであなたが生きているかのように、こーやって話しかけているんだから、おかしなことよね。

やっぱりもう少し時間がかかるかも。

最後に、悲しい報告が一つあります。本当なら、今年もう一大家族が増えるはずだったのに……。ごめんない。あなたがいなくなっただけで……いいえ、あなたのせいではいけないわ。私が

もう少し強くならなくっちゃ。亮介を育てていかなければいけないんですものね。

でも、亮介に兄弟を増やしてあげられなかったことが悔やまれます。

私たちは、この一年で、たくさんの大切なものをなくしました。もう二度とこんな辛い思いしたくないわ。

それじゃ、さようなら。

長いこと潮風に吹かれながら手を合わせていた。突然海面を渡ってきた風が強く吹きつけた。

「お父ちゃん？」

風に驚いたわけでもないだろうが、隣で、不意に亮介が声を上げた。父の姿を求めているのか、キョロキョロと辺りを見回している。

「お父ちゃん、いるの？　ここだよ、僕、ここにいるよ！」

「亮介！　ここにはお父ちゃんなんかいないわよ。どうしたの？」

「ううん、お母ちゃん、いるよ。やっぱりここにいるんだ。声が聞こえた……お父ちゃんと呼んだんだ」

断崖に立っていることを忘れたかのように、ふと亮介が何も無い空間に手を伸ばし、歩き出そうとした。里子は慌てて息子を抱き留める。

この場所に来たのは逆効果だったのだろうか？　来れば父親がもういないことをわかってくれると思ったのに、逆に消えた父親の記憶を呼び覚ましてしまったのだろうか？

「どうしました？」

隣に立っていた若い学生風の男性が、何かと里子ら親子を見た。

「いいえ、何も……」

「今、声が聞こえたって……」

「私には何も……。この子の気のせいですわ」

「そう、ならいいんだけど。断崖のこの辺りに立つと、亡霊の音が聞こえるって話を、さっき向こうで聞いたもんだから」

「亡霊の声？」

里子は急に不安になった。

ここは名高い自殺の名所でもある。そここに自殺を思い止まらせる文言もんごんを書きつけた看板が立ち、観光地の華々しさとは裏腹に、人気のない岩影などには、追い詰められた人々の絶望の捨て場でもあるかのようなもの寂しい気配も漂っている。

まさかとは思うが、亮介が自ら命を絶った者たちの魂に呼ばれているのだとしたら……。あるいは、もしや夫があの子から息子を呼んでいるのだとしたら……。考えるだけでも怖ろしくなる。この上さらに、この子を奪おうなんて、神様は無慈悲に過ぎる。

「亮介、お父ちゃんはどういうのよ。さあ、帰ろう。何だか寒くなってきたわ」

里子は亮介を促し、足早に岩場を後にした。

*

お父ちゃん、僕、大きくなったでしょ。もう一年生になったからね。

お母ちゃんはね、僕がお父ちゃんはまだここにいて言うよ、変な顔するんだよ。

けど、お父ちゃん、今でもいるよね？ だって、あの時もいたでしょ？ 僕、わかってたよ、お父ちゃんがすぐ近くにいます。

亮介って呼んだでしょ？ 僕、すぐに戻ってくると思って、ずっと待ってたんだ。

お母ちゃんは救急車に乗って行ってしまっし、周りにいた人たちも少しづついなくなるし、僕、どうしようかと思っただけど、でも、お父ちゃんが戻ってきたら困ると思って、待ってたんだ。

僕、泣かなかったよ。だって、お兄ちゃんになるはずだったんだもん……。

ねえ、お父ちゃんがまだここにいてってこと、お母ちゃんに教えてあげてよ。

それとも……それとも、本当にお父ちゃん、いなくなっちゃったの？ 死んじゃったってこと？

死ぬってというのはこの世からいなくなることなんだって、お母ちゃんには言うんだ。でも、今までいた人が急にいなくなったら、その人はどこへ行ってしまっしやうだろう。

太一くんのお祖父ちゃんがこの前死んだんだ。僕、お母ちゃんとお葬式に行ってきたよ。お祖父ちゃん、箱の中にいた。死んでも体はなくならないんだ。

でも、お父ちゃんは違うよね。体ごとなくなったでしょ？ 死んだんじゃないよね。消えたただけだね。だから、また戻ってくるんだよね……。

亮介は父の消えた空間を見つめていた。

父がいなくなった時のことを、その後何度も思い返してみた。

あの時、確かに父は崖から足を踏み出した。しかし、海面に向かって落ちていくことはなかった。そのまま、何歩かススッと足を動かして、見えない部屋の中へ呑み込まれてしまったかのように、突然いなくなったのだ。まるで、魔法を見ているみたいだった。どうだ驚いたか、と言って、父がすぐに現れるかと思った。が、亮介を呼ぶ声だけを残して、父は跡形もなく消えたのだ。

そう、消えてからも、父は亮介の名を呼んだ。どこだ、と問うた。

亮介に父が見えなかったのと同様、父にも亮介が見えなかったのだ。しかし、声ならば届くのかも知れない。一瞬だが、互いに声を交わし合った。

父は亮介がいなくなった後も、この場所ですっと亮介の名を呼び続けていたのではないだろうか。答えるものがいなくなり、父は戸惑ったのではないだろうか。

もしあのままあそこにいれば、父は声を頼りに戻ってきたかもしれないと思うと、亮介一人が居残ることなど不可能だったとはいえず、後々悔やまれてならなかった。

父はきっと待ち続けているに違いない。人知れぬ通路のようなも

のがあって、そこへ入り込んだまま出てこれなくなかったのだ。向こう側の世界で出口を捜しているに違いない。誰かがこちらで合図してやらなければ、元の世界へ戻る道がわからないのだ。

亮介は父の消えた辺りの空間を一心に見つめた。その時、不意に海の上を渡ってきた風が強く吹きつけた。一瞬、父のおいを嗅いだような気がした。普段着にしている背広に染み込んだ煙草のにおい……。

「お父ちゃん！」

どこからも答えはない。ただ母が驚いた顔で亮介を見ただけだった。

「お父ちゃん、いるの？　ここだよ、僕、ここにいるよ！」

(……亮介なのか?)

確かに聞こえた。それは打ち寄せる波の音に紛れ、吹きすぎる風にすぐさま消し去られたが、確かになつかしいあの父の声に違いなかった。

「亮介！　ここにはお父ちゃんなんかいないわよ。どうしたの？」

母の声を押し戻すように「いるよ。やっぱりここにいるんだ。声が聞こえた……お父ちゃんと呼んだんだ」

亮介はあの時父がしたように、目の前の空間にそっと手を伸ばしてみた。

不意に強い手が亮介の身体を抱き留めた。いつになく険しい目で母が見ていた。

(どこだ？　どこにいるんだ……)

「なおも問う父の声に答えることがなぜか悪いことのように思えて、亮介は黙り込むしかなかった。父は手を伸ばせば届くすぐそこにいるかもしれない……。しかし、目の前には、柔らかな日をキラキラと跳ね返す、午後の海原が広がっているばかりだった。

母は隣にいた男性と二言三言言葉を交わすと、亮介の手をギュッと握り締めた。

「さあ、帰ろう。寒くなってきたわ」

亮介は母に手を引かれ、売店の方へと歩き始めた。

*

この闇の世界には空間があつてないのと同様に、時間の流れもあるのかないのか、まったくわからない。自分の手や足が確かに存在していることは触覚によって確かめられるが、光が射さないからか、それを見ることはかなわなかった。もちろん顔を鏡に映すこともできない。皺の一本も増えていれば、確かにこの世界にも時間が存在することがわかる。しかし、触れてみるだけでは、皺も何も確かめられはしなかった。

俺が触ることができるものといえば、自分の身体以外には、この空間に迷い込んだ時身に着けていたものくらいだ。

会社勤めが決まった時に買った背広の上下。着古して普段着にしていたものを、今も着たままだ。内ポケットには財布が入っている。千円札が二枚と百円札が四枚、後は小銭ばかりだ。しかし、もし仮

に百万円あったところで、この世界では使えないようがない。

マッチでもあれば擦ってみるのだが、あいにく煙草と一緒に売店のベンチの上に置いてしまった。

ふと思いついて五円玉——たぶん五円玉だろうと思う——を投げしてみたが、それは音もなくどこかへ飛び去り消えてしまった。いや、五円玉は飛び去って消えたというよりは、手を離れた瞬間からすでにどこへいったのかわからなかったというのが正しい。この世界では、自分が手で探れるもの以外は存在しないに等しいのだ。

その意味では、ここには「空間」と呼べるものも存在しないのかもしれない。どこを探しても壁や地面、天井にあたるものはない。どこまでもひたすら真っ暗な闇が続いているばかりだ。それこそは「絶対の無」というものなのかもしれない。俺はその無の中にポツカリと浮いているのだ。

不思議なのは、生理的な欲求がまったく起こらないことだ。自分の感覚では、すでに相当長い時間この場所にいるように思うのだが、何かを食べたいとも思わないし、尿意を催すこともない。煙草を吸いたいとも思わなかった。

これはやはり、時間というものがこの世界には存在しないということを意味しているのかもしれない。つまり、時間の経過による肉体的変化がないために、生理的な欲求が起こらないのかもしれない。

ならば腕時計はというと、この闇の世界では、目の玉にくっつくほど近くへ持ってきてても、針の動きをみることはかなわないのである。もっとも、時計はいつの間にもやら止まってしまっているらしい。

耳に当ててみても、それが時を刻む音は聞こえてこないのだ。いや、止まったというより、時間のない世界で仕事を放棄してしまったのだから。

むろん、においもないし、食べ物を口にしないのだから、何かを味わうこともない。

五感の全てを閉ざされてしまった世界、それはやはり死の世界なのかもしれない。とするなら、元の世界で俺はすでに死んだものと見なされているのかもしれない。いや、事実、これこそが死の正体なのかもしれない。

しかし、俺が完全に死を受け容れられないのは、時折風に運ばれたラジオの混線のように、不意に聞こえてくる、向こうの世界の音があるからだ。それは、景色に驚く若い女の声であったり、翌日の予定を確かめる中年らしき男性の声であったり、あるいは、けたたましい無遠慮な笑い声であったり……。

いずれも断片的で脈絡もなく、まるで間違いを慌てて掻き消すかのように、方向を確かめる暇も与えず、一瞬でどこかへ消えていく。その度、俺はビクリと身体を震わせ、声のした方向を大慌てで確かめようとするのだが、上も下も前後左右もないこの世界では、方向感覚というものも機能することを止めてしまいうらしく、声はどこから聞こえたのかを知ることができないのである。

相手の声が聞こえるならば、こちらの声も向こうへ聞こえるのではないかと、これまでに何度も大声で呼んでみた。

しかし、多くの場合、何の反応もない。ごく稀にあったとしても、

意味を汲み取ることの不可能なざわめきでしかなかったり、こちらの
の思惑とは無関係なありふれた話し声でしかなかった。

焦燥感が募る。もしこのまま元の世界に戻れなければ、里子や亮
介はどうなるのだろうか。来年には二人目の子供も産まれてくる。新
しい子は生まれ落ちた時からすでに、父無し子の運命を背負わなけ
ればならない。

馬鹿な。

戻れないなんてことがあるわけがない。腹が空かないのも、自分で
思っているほど時間が経っていないからかもしれない。何かの拍子
にふと気がつけば、元の断崖に立っていたりするのではないか。ま
るで夢でも見ていたかのように。隣には打ち寄せる豪快な波しぶき
に見とれる亮介がおり、振り向けば売店の前のベンチに腰かけて二
人を待っている妻がいるのではないか……。

しかし、いくら目を瞬かせようと、いくら太股を振りあげよう
と、いっこうに闇が払われる気配はない。

吐き気を催すほどに激しく手足を動かして蕩揺こうが、いても立つ
てもいられず爪を噛んで焦りを募らせようが、世界は闇に包まれた
ままだった。

入ってきたのだから、どこかにきつと出口があるはずだ。ともか
く出口を捜さなければ。足掻き回るのはひとまず中止し、勘を頼り
に、入ってきたと思しき方へと足を進めていった。

闇の中を突然何かが横切った。二つの絡み合う花束のように見え

た。ほんの僅かな時間だったが、それは自分の網膜に鮮やかな残像
を残して、一瞬後には再び闇の果てへと消えていった。

現れた方向を確かめようとしたが、目の前にあるのは依然として
暗闇ばかりだ。不意を衝かれたために、行方を見定める余裕すらな
かった。

しかし、続いて稲妻のように人の声が闇を切り裂いた。

(覚えているかしら、あなた……)

思わず身を強張らせる。これは……妻の声に似ていた。

「どこだ？」

辺りを見回すが、今まで通りの果てしない暗闇が広がっているば
かりだ。

「里子！ 里子、どこだ？」

応える声はない。自分は全身を緊張させ、耳にのみ神経を集中さ
せた。

(……トバイ、売って……ごめんなさい)

間違いない。里子の声だ。

だが、ごめんなさい、とはどういうことだ？ トバイって……オー
トバイを売ってしまったって言うてるのか？ なぜだ？ どうして
単車を売る必要があるんだ？

ほんの僅かな声も聞き逃すまいと、一切の身じろぎもせず、耳だ
けの生き物になったかのように、聴覚を研ぎ澄ませる。自らの衣擦
れの音どころか、指の微かな震え、呼吸する僅かな空気の揺らぎす
ら、あちらの世界への手がかりを掻き消してしまいで、瞬きす

ら忘れて神経を集中させた。

心臓が打つ鼓動さえ騒音に聞こえるほどの静寂。耳の底を流れる血の音さえ豪雨の川の流れに思える静けさ。

無音の闇にそのまま押しつぶされそうな不安に苛まれ、もはや耐えきれず、もう少して叫び出そうとした瞬間、微かな人声が電光のように閃いた。

(……悲しい報告が……ます……今年もう一人……だった)

どこにいる？ もっと、もっと、しゃべってくれ！

(……一年で……大切なものをなくしました。もう二度と……)

「里子！ どこだ！ 俺はここだ！ ここにいるんだ！」

必死になって、声のした方向を探ろうと辺りを見回す。しかし、どこを向いても際限のない闇が広がっているだけだ。

「どこだ！ 今そっちに行く！ もっと声を！ 声を聞かせてくれ！」

無駄だとわかっていても、駆け出さずにはいられた。何の踏み応えもない闇の中を全力で走る。

実は、どこにも行き着けず、風切り音すらしない真っ暗な空間で、ひたすら藻掻き回っているだけなのかもしれない。しかし、何かせずにはいられた。走り回り、這いずり、のたうち、狂ったように叫ぶ。どれほど無様でも、元の世界に帰るためなら厭わない。

だが、どんなに叫んでも、声は虚しく闇に吸い込まれていく。どれほど足を動かしても、闇の厚みに変化はなかった。

激しく消耗して、もう一步も踏み出せず、倒れ込んだ。

真っ暗な静寂が重くのしかかってくる。

(お父ちゃん？)

「亮介？ 亮介なのか！」

(ここだよ、僕、ここにいるよ！)

「どこだ？ もっとしゃべってくれ！ どこにいるんだ！」

だが、雷鳴のように闇を切り裂いた声は、自分の胸に鋭い光芒を一瞬投げかけただけで、強風に飛ばされる波しぶきのように再びどこかへ消え去ってしまった。

「亮介！ 里子！ 待ってくれ！ もっともっと声を聞かせてくれ！」

俺はここにいるぞ！ ここだ！ 亮介！ 里子！」

しかし、二度と愛するものたちの声が聞こえてくることはなかった。

三

あなた。どこかで私を見ているかしら？

今日はあなたとたくさん話をするためにやってきました。

何から話しましょうか。

そうね、あなたが好きだったジャイアントの話はどうかしら。

巨人軍は今年十連覇を逃しました。ええ、あなたがいなくなつてからジャイアントは五年も優勝し続けたの。連覇が始まったのって、亮介がまだ三つの時でしたよね。大きすぎるグループを無理矢理あの子の手にはめて、あなたがボールをトスしてあげたのを思い出します。うまくキャッチできると、きゃっきゃって笑い声を上

げて……。

亮介はすいぶん野球が上手になったのよ。もう私じゃキャッチボールの相手に全然なれないくらい。お義父ちゃんでももう無理なの。すごく速い球投げるんですもの。

「お父さんのボールって、もっと速かったよね」

あの子、そう訊くの。でも、私、あなたの投げる球なんて、一度も受けたことなかったわ。

「長島と同じくらい速かったかなあ」なんて真剣に言ってるの。相手はプロなのにね。

あなた、驚くかな？ 長島は引退したのよ。

「わが巨人軍は永久に不滅です」って、亮介がしょっちゅう真似してるわ。引退の時のセリフ。長島の引退劇は映画にまでなってるわ。亮介はお友達と見に行って、目を真っ赤にして帰ってきたのよ。

まるで本当の引退セレモニーを見えるように、みんなが拍手したり応援したりしたんですって。「ながしまあー、辞めないでくれえー」ってスクリーンに向かって叫んでるおじさんがいたって笑ってたわ。あなたもテレビを見てたら、叫んでるかしら？ あなたならどんな記事を書いたでしょうね？

近頃世間で流行ってるものに、ノストラダムスの大予言っていうのがあるのよ。亮介も友達から借りて読んでるわ。私もちょっと覗いてみたんだけど……。

一九九九年七月に世界は滅びるって言うの。今から二十五年後って、想像つかないわね。私、皺がたくさん増えてるかな。亮介なん

て、三十七歳のおじさんよ。あなたが亡くなった歳をとくに越えちゃって。

その年に、空から恐怖の大王が降ってくるんですって。何なんでしょうね？ 巨大隕石かしら？ それとも、異常気象かな？ 過去の事件に関する予言もいろいろと残っていて、いくつもの中させてるんですって。

その前触れっていうわけでもないんでしょうけど、今年になってからやたらと不幸な災害が多いのよ。四月には山形県で山崩れがあって、五月には伊豆で地震でしょ。七月には台風で百人近くが亡くなったの。八月には東京で時限爆弾が爆発して何人も死傷者が出たし。

あなた生きてたら、きつとてんでこ舞いだわ。徹夜徹夜で取材に明け暮れていたことでしょうね。長島の引退どころじゃなかったかもよ。

あ、そうそう、覚えているかしら？ あなたがいなくなる一月ほど前だったか、タイガーマスクってマンガがテレビで始まったでしょう。あれ見ながら亮介とプロレスごっこしてたわよね。

タイガーマスクね、去年再放送されてたのよ。私が夕方お仕事から帰って、亮介に何してたのって訊くと、いつもタイガーマスク見てたって答えるの。あの子があればど熱心に見てた番組ってないんじゃないかしら。再放送なのよね。いいえ、再放送だからよね。あなたのこと、思い出してるんだと思う。

あの子、あなたがまだ生きてるって信じてるみたいなの。

もし仮に……もしもよ、どこか見知らぬ世界であなかが生きてい

たからと行って、今さらどうなるものでもないじゃない。否が応でも時は流れていくわ。人はその流れに抗うことなんてできやしない。流されながら、せいぜい自力で泳いでいるふりをするだけ。

本当なら、今日亮介と一緒に連れてきてあげてもよかった。でも、あの子、ここに来れば、やっぱりあなたが生きてるって言い出すような気がするの。もし……もしも、前の時みたいに、あなたの声が聞こえるなんて言い出したら、私……。

ごめんなさい。
今の私はあなたの声を聞きたくないんです。ええ、聞くのが怖いんです。
ごめんなさい。

ここに来る時はいつも謝ってばかりね。こんなことを話すつもりじゃなかったのに。もっと、楽しかったあの頃の想い出を、今日はうんとお話して、それで終わりにしようと思っていたのに。

義父も義母も、里子を咎めるようなことは一切言わなかった。ただ娘を買い物にでも送り出すかのように、行っておいでと優しく言うてくれた。それが里子には余計に辛かった。

里子が決意したのは、ブラウン管の中に忽然と現れた過去の亡霊を見た時だった。

一昨年グアム島で横井庄一という元上等兵が発見され、さらに今年ルバング島で小野田寛郎元少尉が救出された。終戦を知らぬまま三十年近くも、彼らはジャングルの中で息を潜めて生きてきた。

毅然と背筋を立て口角に泡を溜めて訥々^{とつとつ}としゃべるあの姿に、失った時間の大きさを思い知った人々も少なからずいたようだ。義父も義母もそんな中の一人だった。テレビ画面を食い入るように見つめそっと涙を拭う義母は、ボロボロの軍服に身を包んだ小野田の姿を、消えた息子と重ね合わせていたのかもしれない。

その一方で、帰国の際「天皇陛下万歳」を唱えた小野田を軍国主義の亡霊と呼んだ人たちもいた。流れ行く時間に身を委ね、変わり続ける時代の中をどうにか溺れぬよう泳ぎ続けた人々にしてみれば、それは確かに忌まわしい過去を思い起こさせる亡霊に違いなかった。そして、里子も彼らを亡霊と感じた一人だった。

残されたものたちにとって、彼らはもはやこの世にいないも同然だったろう。それが、ある日突然、帰ってくる。これが戸惑わずにいられようか。日本人にとって戦争がはるか遠い過去のものとなってしまうように、里子にとって夫はすでに古い想い出になりつつある。六年は長かった。その長い空白を経て、夫が突然帰ってきても……今の里子には拒むことしかできない。

移り行く現実の中で、目の前にはないものを信じ続けることは難しい。六年という歲月は、互いに触れあうことのかなわぬ人と人との絆を、切れる寸前にまで弱めるに充分だった。

相変わらず海からは潮の香りをたっぷり含んだ風が吹いてくる。この断崖はこうして何百年何千年も風に甦^{なご}られてきたのだろう。人が生きる時間など、生死を知らぬ鉱石の塊^{なご}にとっては、ほんの瞬きをするほどの時間ではないのかもしれない。しかし、生身の人間

にとつて、時の流れというものは、何と残酷なものなのだろう。

裏切り者——そう誰かに罵られれば、いっそ吹っ切れたのにとも思う。しかし、かけられるのは慰めの言葉ばかりだった。亮介すら、微笑んで賛同の意を示した。しかも、亮介は母と別れて、義父母と暮らすと言う。

不意に、夫の消えた地をもう一度見たくなって、ここにやってきたのだった。荒波の打ち寄せるこの断崖こそ、過去を葬るに相応しい場所に思えた。

もはや二度と訪ねることはないだろう。

夫が——戸籍の上ではもうとっくに夫ではなくなっていたが——左の薬指にはめてくれたシルバーのリング。どうしても外す決心がつかなかった。里子はそれをそっと薬指から抜き取る。

手の平に乗せたリングに、涙が一粒こぼれて落ちた。

里子は愛おしむようにリングの表面を指でなぞり、亮介とキャッチボールをする時のように大きく腕を振って、うねる海原へと放り投げた。

小さな金属はあつという間に視界から消え、海面には強風に煽られた白い波涛ばかりが目立っていた。

あなた、向こうの空が暗くなってきたわ。今晚から暴風雨になるらしいの。どうか、季節外れの嵐があなたの心を騒がせませんように。

*

狂おしいほどに身を焦がし、声を求める。息子の、妻の、耳の底に焼きついた声はどこかからもう一度流れてはこないかと、必死の思いで這いずり回った。しかし、二度と彼らの声が聞こえてくることはなかった。

暗闇の中にポツンと取り残され、断片的な言葉の意味を改めて考えてみる。

(……トバイ、売って……悲しい報告……今年もう一人……一年で……大切なものをなくしました……)

わからない。

いや、わかりたくない。

オートバイをどうしたというのだ？ 今年もう一人、何だというのだ？ 一年で大切なものをなくした、その一年とは……自分が向こうの世界から消えて、一年が過ぎたということなのか？

馬鹿なことを！

自分がここに迷い込んでから、感覚的にはまだほんの数時間しか経っていない。どんなに長くても、一日かせいぜい二日だ。その証拠に、腹が空かないではないか。排泄の欲望も起きないではないか。

しかし、この世界に時の流れというものが無いのだとすると……。

自分は浦島太郎になってしまったのか？ もし元の世界に戻れても、何十年、何百年もの時間が過ぎて、家族の誰もいないような場所に舞い戻ってしまうことになるのだろうか？

だが、ここには竜宮城も、おいしい御馳走も、鯛やヒラメの踊りもないではないか。

ここにあるのは、ただ際限のない暗闇だけだ。それと、闇の中にポツンと取り残された、孤独な男の魂だけだ。

「答えてくれ。俺がいるのは、どこなのだ？俺はどうすれば家族の元に帰れるのだ？もしこれが神の気紛れならば、今すぐに俺を向こうへ戻してくれ。お願いだ」

しかし、答えるものではなく、ただ耳の奥が痛くなるような静寂を生み出す、漆黒の闇だけが広がっていた。

唐突にラジオに割ってはいる混線のような声が、時折不意に湧き上がり、俺を脅かし、慌てさせることはあった。しかし、そのほとんどは意味をなさぬ断片的なざわめきでしかなく、稀に意味を汲み取ることはできても、この闇に差す一条の光芒とはなりえないような他愛もない会話でしかなかった。

自分はその度にキョロキョロと辺りを見回すが、闇は毛筋ほども揺らぐことなく、声は一瞬で彼方へ逃げ去った。後に残されるのは、より深い失望である。

従って、それが闇を割って不意に聞こえた時も、その瞬間は、今までと同様に無意味に鼓膜を震わせる、自分とは無関係の単なる他人の声だと思わなかった。

(……巨人軍は永久に不滅です……)

それだけなら、ありふれたジャイアンツファンの戯言(たわごと)と、いつもの泡沫のごとく消えるにまかせればよかった。しかし、声はその後に「亮介」の名を続けた。

自分は電撃に打たれたように、身を強張らせた。

(……真似するの。引退の時のセリフ……)

何千人何万人の中からも聞き分けられるその声――。

「里子！」

どれほど目を見開こうが、網膜には形を持った何ものも像を結びはしない。あるのは目を開いているのか閉じているのかさえわからぬ真っ黒の闇ばかりだ。しかし、一歩でも声の方へ近づこうとして、俺は身悶えするように手足を動かした。

「里子！ここだ！俺はここにいるぞ！」

しかし、小動物が大きな物音に驚いて逃げ出すように、妻の声はすぐさま闇に融けて聞こえなくなった。

「里子……もっと、もっとしゃべってくれ。……お願いだ、声を聞かせてくれ……」

膝においた手に、不意に熱いものが触れた。久しく味わうことになかった思わぬ刺激は、焼け火箸を押し当てられたように鮮烈だった。自分は闇の中でまさしく飛び上がらんほど驚いた。

しかし、何のことはない。それは自らこぼした涙の滴だった。

(……皺がたくさん増えて……三十七歳のおじさんよ。あなたの歳をとっくに……)

「里子、まだいたのか……。しゃべるんだ。もっともっとしゃべって、俺がどこへ進めばいいのか教えてくれ！」

(覚えているかしら……一月ほど……タイガーマスクって……)

「タイガーマスク？もちろんだ！覚えていたとも！亮介は一

人であれを見ていいのか？ あいつ、俺がいなきや、誰とプロレスごっこをするんだ？ え？ 俺がいなきや、あいつ……」涙が止めどなく溢れた。「あいつ、誰と……」喉の奥から嗚咽がこみ上げる。この暗闇の世界に捉えられてから、感覚的にはまだ僅かな時間しか過ぎしていないつもりだった。しかし、里子の声は十年も二十年もの時間を隔てたかのように、懐かしく切なかった。

(……私はあなたの声を聞きたくない……怖い……ごめんさい) 俺は呆然と立ち竦んだ。

声を聞きたくないとはどういうことだ？ 怖いだって？ 何が怖いのだ？ どうして謝る？ 里子、一体何が起こったのだ？

「教えてくれ！ お前は どうして しまったんだ！」

(……終わりにしよう……)

「何を言ってるのだ、里子。何を終わりにしようというのだ？ お前、まさか……まさか、死ぬつもりじゃないだろうな！」

泣いている場合なんかじゃない。妻を救えるのは、自分しかない。

「里子、待て！ 俺は必ず帰る。それまで待つんだ！」

いても立ってもいられず、目の前の分厚い暗闇へ突進した。闇は周囲を塗り込めたその重量感とは裏腹に、何の抵抗もなく容易に突き進むことができた。しかし、それはこれまでと何の変わりもないことを意味している。自分では、はたして元いた場所から移動したのかさえ知ることができず、そして実際、どこへ行けるわけでもなかった。

「どうしてだ！ 神よ、お前は、俺が妻の死を止めることさえ拒むのか！ この後もこのまま俺を閉じ込めて、肉親の死を看取ることさえ許さないつもりか！」

いくら大声を張り上げようと、応えるものはない。こだますら返ってはこなかった。

「そんな権利がどこにある！ どうして人の人生を弄ぶのだ！」

俺は自分の無力さに絶望し頼れた。幼児がだだをこねるように寝転がって手足をばたつかせ、声を限りに泣き喚いても、闇はそっぽを向いたまま何の関心も見せなかった。

「どうしてだ……どうして……」

その一瞬だった。光芒が闇を縫って流れた。蛍のような小さな光だったが、長らく闇しか見てこなかった目には、フラッシュの閃光が瞬いたかように眩く映った。煌めきはまさに流れ星のように一瞬で闇に融けて消えたが、自分の目はその形をカメラのように記憶に焼きつけていた。

「あれは……」

指輪だ。

だが、どうして指輪が宙を舞う？ 飾り気のないシルバーのリング……一体誰のものなのか？

里子、お前の指輪なのか？ どうして指輪が？ お前は一体どうしてしまったのだ？

しかし、闇は厳然と答えを拒んでいた。ただ小さな妻の声だけが、残り香のように、闇の中を漂った。

(……あなたの心を騒がせませんように)

後には、全てが死に絶えたような暗闇だけが残された。

「里子、待っていてくれ！ 俺は必ず帰る！ お前たちの元へ何と
してでも帰るぞ！」

四

祖母は台所で食後の片づけをしている。祖父の姿は見えなかった。茶の間では点けっぱなしになったテレビが映像を垂れ流している。

二階に上がりかけて、亮介はふと足を止めた。市古いちことかいう名の見覚えのある霊能者が、投稿された心靈写真の鑑定をしていた。写真が大写しになる。連なる岩場の上で、男女のペアが互いの身体に手を回していた。背後は海だ。二人の頭上に白い雲のような影が浮かんでいる。

亮介は画面に惹きつけられた。

「間違いありませんね。ここで自殺なさった男性の霊です」霊能者が目をしょぼつかせる。「これは持っていないほうがいいですね。

こちらで供養しておきましょう」

「えー、実はですね」司会者が割ってはいいる。「この写真の撮られましたW県のS崖は、これまでも数々の奇怪な噂が出ているところでありまして、地元でも評判の心靈スポットなんですな。しばしば亡霊の声が聞こえる場所として、数年前から観光半分肝試し半分の若者たちがずいぶん訪れるようになったそうなんですよ」

画面が切り替わり、夜の断崖が映し出された。ろくに名も知らない女性アイドルとレポーターがマイクを手に立っている。

「今夜はなんと、ここにですね、中継が繋がってます。高橋アナウンサー、聞こえますか？」

「はいはい。聞こえますよ。いや、こちら寒いですねえ。風が強くて」

「えーと、今いらっしゃるのが……」

画面には再び写真が大写しになる。人物の頭上の白い雲のような影は、確かに人の顔のようにも見えた。

亮介の口からつぶやきが漏れた。「父さん……」

「この写真に写ってるこの場所ですね？」スタジオのアナウンサーが訊く。

「ええ、そうです。ちょうどこの辺りです。我々のいる少し上の、ええーこの辺ですかね」レポーターが空中を指差した。「この辺りに人の顔らしきものが浮いていたんです」

「ユミちゃん？ どう、そちらは？」

「なんだか、とっても気味悪いです。霊気っていうんですかあ、こ
う海からブワッと上がってくる感じで、とっても怖いです」

「いけませんね」市古がモニターを凝視しながらつぶやく。「そこ、あまり長くいないほうがいい」

「何ですか？ 何か見えますか？」

「霊がうようよしてる。この方もいますね」市古が先ほどの写真を指差した。「早く場所を移ったほうがいい」

「嘘つき」亮介は拳を握り締めた。

「何か言った？」台所から祖母が呼びかける。

「ううん、何でもなし」亮介は再び画面に見入った。

画面では司会者がしゃべり続けている。「だそですよ、高橋アウンサー。じゃあ、次の現場へ移動してください」

映像が切り替わった。レポーターと女性タレントは暗い岩場の遊歩道を辿っていく。

「あ、ここにこんなのがありますよ」レポーターが指差したのは、自殺を思い止まらせる文句を書きつけた看板だ。

「やだあ。怖い」女性タレントが大きさに後ずさってみせる。

やがて撮影用ライトに照らされた二人は、「洞窟入り口」と看板のある売店まで来た。

「普段ならば夜の中には入れないんですけど、今日は特別に入れていただくことになりました。さあ、行きましょう」

レポーターが階段を下り、タレントが怖々その後についていく。

しばらく進み、分かれ道まで来て、二人は暗く狭い方の洞窟へと入っていった。

「あ、今、何か物音が聞こえませんでした？」

「きゃー、やだー」

「何の音でしょう？」

ライトが前方の闇を照らし出す。湿った岩肌が下方に向かって続いていった。二人はさらに進んでいく。

「あ、聞こえますー」レポーターが声を張り上げる。

地鳴りのような低くくぐもった音が、マイクを通して聞こえてきた。

「波の音だよ」スタッフらしい声。

「波？ この奥から？」レポーターはさらに進んだ。

音は徐々に大きく聞こえ出し、それが規則的に寄せては返す波の音であることがはっきりしてきた。

「あ、あれ？」レポーターが驚きの声を上げる。「ここに鉄柵があります。これ以上進めないようになってます」

カメラは行く手を遮る鉄格子を映し出す。門かど部分には頑丈な鍵が取りつけられていた。

「え？ 何、何？」

スタッフの一人がレポーターに何やら説明している。

「ええー、やだあ、怖いよう」女性タレントが後ずさりして鉄柵から遠ざかった。

レポーターがカメラに向き直る。「えー皆さん、この先洞窟は海へと繋がっているそうです。海流のせいかこの洞窟出口付近には水死体が流れ着くことが多く、定期的に警察や消防団の方が見回りに来るのだそうですが、普段は人が入り込まないようにこのようにガッチリと錠を下ろしているのだそうです。過去にはこの先で数々の怪現象もあったそうで、あまりに騒ぎが大きくなり、現在は一般の観光客は立入禁止になっています」

打ち寄せる波の音が画面を通して伝わってくる。その音に混じる微かな気配を亮介は感じていた。画像を通じて二人の背後の暗闇に

目を凝らす、特に変わった様子もない。ただ何かがいるという気配だけはヒシヒシと亮介の心に迫ってきた。

「父さん……。そこにいるのかい？ 父さんだろ？」

亮介の呟きになどかまうことなく、不意に画面がスタジオに戻る。

「ああー」市古がモニターを見ながら、欠伸とも呻きともつかぬ声を上げた。「あまり軽々しく近づいちゃダメだよ。ここは早く引き上げたほうがいい」

「はあ、それでは、そろそろ引き返しましょう」

二人は一旦もとの分かれ道まで戻り、もう一方の洞窟へと足を進めた。

「ん？ 何かにおいがしない？」タレントが鼻を蠢かせる。

「におい？ ああ、そういえば……。何だろう、これ」

「お線香？ 違う？」

「そうだ、線香だ。どうして線香のにおいが……」

「やだあ。もう気持ち悪いよー」

「もう少し行ってみましょう」

二人は無言でそろそろと進んでいった。

「あ、何か声が聞こえる。聞こえない？」レポーターがカメラを振り向く。「ねえ、あれ」

「ほんつとにヤダ！ もう帰ろうよう」

女性タレントは本気で怖がっているらしい。半泣きになって、レポーターの袖を引っ張っている。

「お経？ だよね？ 奥に誰かいるの？」

スタッフに促され、二人はなおも進んでいった。奥の闇に光が揺れた。洞窟の壁に映る影が、大きく揺れる。やがて何本も蠟燭が点された、広い部屋のような場所に出た。三人の僧が、白い覆いのかかった石碑らしきものの前にひざまづき読経していた。

「あ、お坊さんですね。あの、ちょっとすみません。お話を聞かせていただけますか」レポーターが呼びかける。

一人の僧が振り向いた。

「どうも申し訳ありません。こちらで何してらっしゃるんでしょう？」

「ああ、これね。この度ここに慰霊碑を建てまして、明日ここで落成の記念式典が行われることになったとるんです。この海で亡くなられた方のご冥福を祈りましてね、こうして立派な石碑ができましたので、明日無事に式典を迎えられますよう、私ら今晚はここで供養申し上げておるんです」

「なるほど、そういうことだったんですね。ということとは、ここはやっぱり水死者なんかが……」

(暗い。洞窟かどこかに入ったようだ……)

今まで思い出すこともなかったあの時の父の言葉が、不意に脳裡に蘇った。亮介はテレビのスイッチを叩きつぶすような勢いで消した。

「祖母ちゃん！ 僕、明日、S崖へ行ってくる！」

前かけて手を拭きながら、祖母が不審そうな顔つきで居間を覗いた。「S崖って、お前、あそこは……」

「僕、一人で行って来るから」

「どうしたんだい、急に。お前、受験前じゃないか。大丈夫なの？」
「四月からもう高校生なんだよ。大丈夫だよ」
「お祖父ちゃんと一緒に行ってもらいなさい」
「いいよ。一人で行きたいんだ」

*

分かれ道の一方には立入禁止の柵が設けられていた。記念式典とやらのためか、人の流れが途切れることなく続き、昨夜テレビで見たまう一方の洞窟へ入り込むチャンスはなかなか訪れない。亮介はおよそ一時間も洞窟の中を行ったり来たりして、ようやく立入禁止の柵を潜り抜けることができた。

真っ暗な中を手探りで進む。岩壁は湿っていて、微かに潮のにおいが漂ってくる。

はっきりと父の声を聞いたわけではない。テレビ画面に何かを見たわけでもない。これといった確かな証拠があるわけではなかった。しかし、地鳴りのように響いてくる波の、寄せては返すあの繰り返しの中に、父の嘆きを感じ取ったような気がした。呼べど応えぬ孤独な魂の哀訴……。

父はあの日以来、ずっと待ち続けていたのではないか。亮介が、母が、応える声をひたすら待ち侘びながら、独り孤独に苛まれてきたのではなかったか。そう思うと、矢も楯もたまらなかつた。

「父さん。僕、亮介だよ」小さな声で囁くように言う。「いるんで

しょ？ 聞こえる？」

やがて昨夜テレビで見た、頑丈な鉄格子の前に出た。まるでこの世とあの世を隔てているかのような門が、暗がりのなかで鈍く光っていた。

亮介は鉄格子を軽く揺すってみたが、もちろん開くはずはなかつた。

「父さん、いないの？ ねえ、いたら返事してよ」

*

自分の声が、この地で命を落とした人たちの亡霊の声ではないかと騒がれていることに気づいたのはいつだったろう。断片的に闇に漂い出す、誰とも知れぬ人々の言葉の端々を繋ぎ合わせて辿り着いた結果だったのだから、その間には長い長い年月が過ぎ去ったのかもしれない。

しかし、自分には相変わらず時間の感覚が欠如していた。この闇の中で、いつの間にも何千何万年の歲月が堆積したようでもあるし、逆にまだわずかに半日しか経っていないようでもある。

その間に、オートバイは無用の長物となり果て、自分がいなくなつたショックで里子は流産し……何度か反芻した妻や息子の声を、また脳裡に思い浮かべる。

引退したのは巨人軍の誰だろう？ 城之内か？ 黒江か？ あるいは森？ 皺がたくさん増えて三十七歳のおじさんになったのは誰

だ？ 俺の年齢をとくに越えたって？ 誰が？ まさか、亮介じゃあるまい。だってあいつはまだタイガーマスクを見ているのだから？

だが……心を騒がせませんように、とはどういうことだ？ そんなことを言われても、これが心騒がずにいられるものか。

里子、早まったことをするんじゃない。必ず自分はそっちへ戻る。亮介も待ち侘びていることだろう。

しかし、どれほど身を焦がし足掻いてみても、黒々とした闇はその密度に少しの変化も見せることなく、永遠と同義語であるかのごとく、それは厳然と我が身を包み込んでいた。

闇を切り裂き、不意に声が聞こえた。

（王貞治がホームランの世界記録を作ったんだ……）

その声はこれまでになくはっきりとした量感を持って、^{くぐり}闇を伝わってきた。

王といえば、亮介が生まれた年から奇抜な一本足打法に変えて、突然ホームランを量産し始めたのだった。それ以来ずっとホームラン王を獲り続けていたが、その王が世界記録だって？ バカな。世界記録って何本だっけ？ 七百か？ 八百か？ そんなに打つまでに、一体、何年の歳月を必要とするんだ？

（僕は残念ながらレギュラーを逃しちゃった。大会前に酷い捻挫をしてね。僕とレギュラー争いをしていた秋本にポジションを奪われてしまった。癩だなあ。あいつ、幼稚園からずっとライバルなんだよな、何をする時も。というわけで、父さん、僕、将来プロ野球選

手になるって夢、諦める時期かな、なんて思ってるんだ。四月からはもう高校生になるんだしね。少しは目の前の現実にも目を向けなくちゃ）

咄嗟に声が出なかった。かつてないほど明瞭に伝わってくる声に、戸惑いを覚えたというのもあったかもしれない。しかし、そんなことより、そのおしゃべりの主の正体に、どう反応してよいのかわからなかったのだ。

声は自分の知っているそれより、低く野太く、すでに大人の領域に入っていた。しかし、それは紛れもなく……息子のものだ。夢はプロ野球選手——ありふれてはいるが、確信があった。

「り……」喉に熱い塊がこみ上げてくる。それをグッと飲み干した。「りようすけ」

闇が沈黙した。

不用意に声を立てたことで、自分は再びあの重い^{くぐり}闇の中に取り残されるのではないかという不安がこみ上げる。しかし、すぐに不安は拭い去られた。

（父さん？）

「亮介……亮介なのか？ 本当に、お前なのか？」

（父さん！ 僕だよ、亮介だよ！）

胸が詰まった。瞬きする間としか思えなかった時間が、実は、何万年もの永劫であったかのように思えた。激しく飢えていた。親子と言葉と交わせる喜びに、親しき者を身近に感じられる幸せに飢えていた。

(父さん、どこにいるの？ 僕のこと、わかる？)

こみ上げる嗚咽が答えを妨げる。

(父さん、待ってたんでしょ？ 僕、きっとまだここに父さんがいると思ってるんだ)

「亮介、お前……」嗚咽を飲み下す。「いくつになった？」

(十五歳。もう中学三年だよ)

「もうそんなに……。足は大丈夫なのか？ 捻挫したって？」

(今はもう大丈夫。捻挫した時、お祖父ちゃんたら、僕を背負って病院まで走ったんだよ。友達に抱えられるようにしてどうにか家まで辿り着いてさ、靴下脱いだら、足の甲がソフトボールみたいに腫れ上がってたんだ。びっくりしちゃったよ。それ見て、お祖父ちゃん、鹿野診療所まで僕を負ぶっていったんだ。いくら近所とはいえ、陸橋を渡らなくちゃいけないし、歩けば十五分はかかったらうじゃない。恥ずかしくて、降ろしてよって何度言っても、歩けなくなったらどうするって言ってさあ。だって、それまで歩いて帰ってきたのね。でも、本当はちょっと嬉しかったんだ。っていうより、懐かしかったのかな。父さんの背中思い出したかった)

「すまない。お父ちゃん、こんなことになっちゃって」

(ハハハッ。お父ちゃんって、懐かしい言い方だね)

「バカ、笑うな。お前たちと別れた時期には、まだそう呼んでいたじゃないか」

(そうだったね。でも、あれから九年も経ったんだよ。僕、もう父さんと身長変わらないと思うよ)

「いくつある？」

(一六五センチちょうど)

「まだ、父さんのほうが三センチも高いじゃないか」

(でも、後二、三年もすれば追い越しちゃうよ)

「そうだな、もうすぐだ。お前、今日は一人か？」

(うん……) 声にためらいが漂う。

「お母ちゃんは元気か？」

(あ、ああ。あのね、母さん……)

声が少し途切れた。

「どうした？ 正直に言ってくれ。まさか、死んだりしてないよな？」
(ハハハ。まさか。元気に暮らしてるよ。でも……) 亮介が口ごもる。

「でも、何だ？ 言え。言ってくれ」

(母さん、他の人と再婚しちゃった)

「さ、再婚……」

ショックを受けなかったと言えは嘘になる。咄嗟に言葉が出なかった。

(父さん……)

「あ、ああ。そうか、再婚したのか」精一杯平静を装った。「幸せそうか？ お前、それでよかったのか？」

「僕はね、祖父ちゃん祖母ちゃんと暮らしてるんだ。母さんは幸せみたいだよ。月に一度は会うことにしてるんだ」

「そうか、そうなのか……。いや……幸せなら、いいんだ。お前は

どうなんだ？ 毎日不自由な思っていないか？」

「うん、問題なし。毎日楽しいよ、って言いたいけど、もうすぐ受験だからね。ほんとはあまり面白くない。でも、高校に合格したら、友達とみんなでキャンプに行くことにしてるんだ。今はそれが一番の楽しみさ」

高校生になるって？ 亮介が？

俺には想像できなかった。俺の中の亮介は、いつまで経っても六歳のままだ。いや、一歳の亮介だって、三歳の亮介だって、俺に中では、はっきりと姿を描くことができる。だが、高校生になった亮介は、どうやっても思い描けなかった。中学生の亮介すら、無理だ。

「お前……高校生になるのか……」

（そう、受験地獄の真っ最中さ）

「高校に行ったら、お前もう野球は辞めるのか？」

（さあね。まだはっきりとは考えてない。でも、ごめん、僕の實力じゃ、プロ野球選手は無理みたいだ）

「かまわないさ。お前の人生だもの。何か他にやりたいことあるのか？」

（父さん、ボクシングなんて、どう思う？）

「ボクシングか。あしたのジョーだな」

（古いよ。今はロッキーさ。主演のシルベスタ・スタローンがすごく格好いいんだ。どん底から世界チャンピオンに挑戦して、最後は負けちゃうんだけど、そこがいいんだよね）

「なんだ、負けちゃうのかよ」

（勝っちゃったら、それこそマンガみたいじゃん。負けるからこそ、人生ってのは面白いんだよ）

「お前、いやにオヤジくさいこと言うようになったな」

（大人になったって言ってよ。ハハハッ）

「ははは。お前が大人になるなんて。ははは」

俺の目尻には、きつと涙が浮かんでいるにちがいない。

*

「何してるんや！ ここは立入禁止やぞ！」

不意に怒鳴り声が割り込んできた。背後のくらがり闇からのっそりと人影が現れた。作業服を着た小柄な年寄りだった。

「お前、一人か？」

「はい」

「今誰かとしゃべってるような声が聞こえとったぞ」

「いえ、僕しません」

「ふうん」疑い深そうな目で、亮介を見る。

「一人で何してたんや？」

父の声はともかく、少なくとも亮介の声はこの男に聞こえたはずだ。嘘をついて下手に言い繕うほうが面倒だと思った。

「しゃべってました」

「しゃべってたって？ こんなところで？ 一人でか？」

「あの……ここで死んだ人の声が聞こえるとかって……」

「昨日のテレビやな。ほんまにあいつら、何の断りもなしに勝手に入り込みやがって。あんなもん、嘘や嘘や」顔の前の蠅を追うように手を振った。

「でも、ほんとに聞こえたんです。僕、たった今、父さんと話したんです」

「父さん？」

「ここに父がいるんです」

「あなたのオヤジさんが？ こんなところにおるわけないやろ」

「いえ、間違いないここにいます！」

老人は少し考えるような顔つきをし、その後哀れむような目で亮介を見た。

「もしかして、兄ちゃんのお父さん、この海で亡くならはったんか？」
死んでなんかいないのと言いたかったが、今はあれこれ説明するのが面倒だった。

「ええ、まあ。まだ僕が小さい頃になくなっちゃって……」

「そうか。けど、それやったら、向こうの慰霊碑の方でお参りしてやった方が、お父さんも喜ばはると思うで」

「慰霊碑じゃ駄目なんです。死んだんじやないから。父さん、この断崖で九年前に消えちゃったんです。スッと空中に溶けてしまうようにいなくなっちゃったんです」

「九年前？ ははあ……そう言えば、昔そんなことを言うとなつた子供がおったな。お母さん、救急車で運ばれていった……」

「そう、それ、僕です！」

「ほお、お前、あん時の……」老人は少し驚いたようだった。
「大きくなったなあ。もうこんなになつたか。そうか、あれからもう九年も経ったのか」

「それで、あの時いなくなった父さんがここにいます。何とかして父さんを助けなくっちゃ」

「オヤジさんの死体は上がらへんかったんやな？ そやけど、坊主、酷なこと言うようやけど、ここにおるといことは、もうこの世では死んでのと同じことなんや」

老人は腰の辺りをガチャガチャ言わせると、鍵を一つ取り出した。それを頑丈そうな錠前に差し込むと、ガチャリと回して鉄柵を開いた。

「入れ」短く言う。

「いいんですか？」

何をするつもりなのかわからなかった。そんな亮介にお構いなく、老人は自分から歩き出した。

「どこへ行くんですか？」

「自分の目で確かめろ」

波の音が大きくなる。潮の香りも強くなってきた。やがて前方が微かに明るくなった。洞窟が海に向かって口を開いていた。小さな波が薄暗い岸辺に打ち寄せている。

「ここには死体が寄ってくる。いわば黄泉の国、冥土の入り口なんや。よう見てみ。こんなところにオヤジさんなんかいてへんやろ？」

亮介は言われてぐるりと見回した。洞窟の入り口付近は他よりも

広くなっている。幾重にも積み重なったノコギリのような岩が、薄暗い天井のほうまで続いてた。その岩々の上に、色とりどりのお菓子やペットボトル、オモチャ、衣類、その他様々なものが置かれている。中にはぬいぐるみやランドセルもあった。

「流れ着いた人へのお供えや。こうして皆」くくなった人を偲ぶんや。面影を慕って手を合わせるうちには、その人の声を聞くこともあるかもしれん。そやけど、それは生きて、ものを言うてるんやない。仏さんの声を聞いてるんや」

しかし、父は違うのだ、と、敢えて亮介も言い張りはしなかった。「さあ、もうわかったら、向こうの慰霊碑にお参りして帰り」

「はい。でも……」

「でも、何や？」

「時々、ここに来てもいいですか？ あの鉄柵のところまででかまいませんから」

「あかん、言うても来るやろ？」

亮介はあいまいに微笑んだ。

「しょうがないなあ。けどな、何かあったら困るし、この爺ちゃんにだけは、一言声かけていくんや。たいがい店の奥におるから。ええな？」

「はい」亮介は素直に頭を下げる。

「あの、最後にもう一度だけ父さんと話させてもらえませんか」
まだわからぬのか、といった表情ではあったが、顔つきに陰し
ものはなかった。

「わかった。五分だけ待ってやる。わしゃ向こうにおるから、五分経ったら来いよ」

「ありがとうございます」亮介は精一杯の笑顔を見せた。

五

（それじゃ、父さん、また来るからね）亮介が告げる。

「ああ、気をつけて」

亮介は帰っていった。声はどこから聞こえてくるのか、言葉进行交流している間中ずっと捜し続けた。しかし、どこに目を向けても、それまでと何の変わりもない闇が広がっているばかりだった。声には方向性がなかった。強いて言えば、頭の中に直接響いてくる感じだった。

結局、この暗闇に出口などないのかもしれない。ここは蟻地獄のように、一方的な入り口だけがあって、入り込んだが最後二度と出ることはかなわないのかもしれない。

しかし、希望がなくなったわけではない。自分が未だ生きていることを、ついに亮介が突き止めてくれた。あいつと言葉を交わせるだけでも、闇の中に一筋の光明を見出したようなものだ。少なくとも、今までのひたすら絶望的で、ひたすら暗いだけの闇ではなくなった。

ただ、時間の流れを自覚できないことだけは、今までと変わらぬ大きな不安だった。相変わらず、腹は減らず、排泄もせず、眠りた

いとも思わないし、疲れることもない。

それより何より、ひたすら人が恋しかった。暗闇に一人取り残される寂寥感にどれほど身悶えしようとも、応えるものがない哀しみは、亮介と言葉を交わす以前よりさらに深くなったように思えた。

*

亮介は時に映画を語り、時に学校のことを語り、そして必ず野球の話をした。

怪物と言われた江川卓というピッチャーが紆余曲折の末ジャイアンツに入団した時には、もう巨人ファンは辞めると憤り、スピードガンが導入された時には、がっかりしたと声を落とした。

「だって、速い投手でせいぜい一四八キロだよ。昔読んだ本には、堀内のストレートは新幹線並の速さだと書いてあったんだから。百キロも遅いじゃん！」

亮介の話はどれも目新しく面白かった。それだけになおさら、時間から取り残されたもどかしさが身に染みだ。

ある時ふと亮介がこんなことを訊いてきた。「ビートルズが日本に来た時、確か父さんも取材に行ったんだよね？」

「ああ、わざわざ東京まで出向いたよ。あんな大騒ぎはなかったな。武道館でコンサートをやるといいうのも物議を醸してさ、どこの馬の骨ともわからぬ芸人に武道の殿堂を汚されてたまるか、なんてテレビで言った評論家が出て、非難轟々さ」

大手の新聞社の中には酷いのがあって、ろくすっぽ取材もせずに、

あらかじめ発表された曲目を鵜呑みにし、当日演奏されたのとは全く異なる演奏曲を書き連ねていた記事もあった。演奏もされていない曲なのに、少女たちの興奮は頂点に達したなどと書いてあって、実演を目にした自分の目からすれば腹立たしい思いをしたものだった。日本のマスコミの多くはビートルズの演奏などよりも、どんなハプニングが起きるかということにしか関心がなかったのだ。

ビートルズを本格的に聴きだしたのは、日本公演の後だった。「涙の乗車券」「イエスタデイ」……改めて聴いてみると、意外とい曲が多かった。

「父さん、ビートルズのテープを持ってたはずだよ。まだどこにあるんじゃないか？」

「え？ それってもしかして武道館での公演のテープ？」

「そんなのじゃないよ。ちゃんと知り合いにレコードから録音してもらったものさ」

「なんだ。そんなものだったら、僕はLPをほとんど持ってるよ」
「LPを？ お前が？ そんなもの、どうやって聴くんだった？」

「もちろんステレオだよ。他にどうやって聴くのさ？」
「そうなのか……。ステレオか……」

カセットレコーダー——それは月給のおよそ四分の一の価格だった——で金持ちの知り合いからようやく録音してもらったテープを聴くような時代は、とっくに終わったのだ。

「父さんはビートルズのメンバーを生で見ただね」

「ああ、遠くからだけどさ」

「メンバーの一人だったジョン・レノンって、去年暗殺されたんだ」

「暗殺？ スパイ活動でもしてたのか？」

「まさか。原因はよくわからないけど、そんなことじゃないようだよ。精神病を患っていたファンが衝動的に拳銃で撃つらしいんだ」

「ファンが？ どうしてファンが撃つんだ……」

新聞記者をやっていたら暗殺事件の記事を書くこともある。あるいは顔見知りの者の事故を扱うことだってある。しかし、そういう事件に伴う哀しみとか怒りなどは微妙に異なる、不思議な感情が俺の心を包んだ。強いて言えば、それは例えようのない寂しい感じ、喪失感とも呼ぶべきものだった。

手の平ですくい上げた砂がサラサラとこぼれ落ちていくように、自分が生きた日々が一つ一つ人生という手の中から擦り抜けていく。こうして過去は自分の前から一つ一つ消え去っていき、今外部を取り巻いているのと同様の暗闇が、自らの内部をも満たしてしまうのではないかと不安が、ふと芽生えた。

「父さん、どうしたの？」

「ああ、いや、何でもない。懐かしいなと思ってさ」

心にもないことを言っごまかした。いつか来るはずの終わりを、その時すでに探し始めていたのかもしれない。

*

成人式を終えた春、亮介は祖父母を小旅行へと連れ出した。祖母は億劫だったが、七十も半ばを越えめっきり衰えの目立つようになった祖父には、最後のチャンスになるかもしれないなかった。

どうして今まで思いつかなかったのだろう。いや、これまでにも何度も思い立ったことはあったのだが、なかなかきっかけをつかめなかった。亮介の中には、状況を変えてしまうことで取り返しのない事態に陥るのでは、という不安もあった。しかし、二十歳を迎え、祖父母への感謝を何らかの形で伝えたいと考えた時、S崖の洞窟へ連れていくことが、亮介にできる最善の方法のように思えたのだった。

祖父は杖を突き、湿った岩壁で身体を支えながらそろそろと暗い中を辿っていく。震える足を踏み締め、コツコツと杖の音を響かせ、祖父を見ながら、もしかすると途轍もない苦痛を強いているのではないかと、亮介は自らを責めた。そして、今頃になって祖父を無理に連れてきたことを悔やみ、なぜもっと早く決断しなかったのかと嘆いた。そこにはかつて亮介を背負い診療所まで駆けた祖父の面影はなかった。祖母にしたところで大差はなかった。ただ二人は亮介の期待に応えたいがために、困難な作業を続けているに過ぎなかった。

いつの頃からか、亮介は鉄柵の門を開ける鍵を渡されるようになっていた。その習慣は、あの老人が二年前に亡くなった後も続いていた。

長い時間をかけて、亮介と祖父母は波の打ち寄せる洞窟の最奥に

辿り着いた。

いつも一人で来る空間に三人が入り込んだからか、何ともいえない違和感があった。打ち寄せる波の音がやけに高く聞こえる。一つ一つの岩角はすでに幾度も見慣れたものでありながら、なぜか初めて目にするものであるかのように鋭く尖って見えた。色褪せたランドセル、きちんと揃えられた赤い鼻緒の草履、未開封のまま汚れたベクトポトル、朽ちた櫛しきみの束……すべてこれまでと何ら変わるところはなかった。

しかし、岩場から波打ち際に足を降ろしぐると見回した瞬間、亮介は絶望的な気分陥った。祖父母を喜ばせるはずの計画はおそらく不首尾に終わるに違いないと、ほとんど瞬間的に悟った。

亮介はいつものように父に話しかけることを早々に断念した。ただどこかで父が聞いているのならば、久しぶりに懐かしい声を聞かせてやりたいとだけは思った。

「ここ来ると、僕はいつも父さんの存在を身近に感じる事ができるんだ。ねえ、お祖父ちゃん、お祖母ちゃん。父さんに話しかけてやってよ」

「亮介、お前はいつもこんなところに来ていたのか」

祖父の目には哀れみの色が浮かんでいる。こんな人の通わぬ暗い場所で一人孤独を慰めていたのかと不憫がっているに違いない。

「お祖父ちゃん」亮介は快活を装って言った。

「この場所はね、天国に通じているんだって。僕たちのおしゃべりもきくと父さんに聞こえているよ」信じてもいいことを口に出し

て言ってみた。

父がいるのは天国などではなく、どこかの時空の裂け目を僅かに潜った向こう側なのだ。そこは空想やお伽噺の世界ではなく、現実にあるはずなのだが、現代科学ではまだ知ることのできない、どこか別の空間なのだ。

「父さん。今日は僕が成人したことを報告するために、無理を言っ
て、お祖父ちゃんお祖母ちゃんも連れてきたんだ。二人ともずいぶ
ん年取っちゃったよ。でも、よく僕が二十歳になるまで元気でいて
くれたと思う。本当に感謝してるんだ。父さんからも礼を言っ
てよ」
「時雄ときお。どこかで聞いているのなら、心配することはないからな。
わしはまだまだ死にはせん。亮介が結婚して子供を生んで……そう
さな、そのくらいまで生きりゃ、思い残すこともなからう。わしが
誉めるのもなんじゃが、亮介はいい子に育ったよ。わしより先に
逝ってしまった親不孝なお前なんぞより、こいつははるかにいい子
だ」

しかし、亮介の予想したとおり、祖父母に対する父の答えはなかつた。

その唖おろれた声を聞いた時、俺の身体は電撃が走ったように打ち震えた。ついこの前まで耳にしていたようでありながら、無限の彼方に沈んでいたかのようなその声。記憶にあるのは、もっと張りも艶を持って、野太い男性的な声だった。今それは張りも艶も失って唖れ、しぼんだ風船から漏れ出る空気のように、勢いも感じられなかつた。

た。

あれはS崖に来る前日だった。仕事帰りに自宅から数百メートル離れた実家にふと立ち寄り、父母と言葉を交わした。

(何かほしい土産があったら買ってようか?)

(そんなに珍しいものもないんじゃないの。そう遠くないんだから、行きたけりゃいつでも行けるし)

(お前たち、日帰りなんて言わずに、せっかくだから一泊してくりゃいいのに)

(それこそいつでも行けるよ)

まだ昨日のここのように、やり取りの細部まで思い出すことができる。前かけをして食器を洗う母、居間でくつろぎながら新聞を広げる父、その服の柄、手つき、白髪の本一本、皺の一つ一つまでを思い浮かべることができる。記憶の中の彼らは、年寄りと呼ぶにはまだ数年の猶予を持った存在だった。

それが、今耳に届いてくる声はどうだろう。確かに同じ声の質を持っているにも関わらず、アツという間に若いエネルギーを吸い取られたかのような、その声。それはもはや人生の黄昏を歩みつつある者の声だ。

懐かしさに身を焦がしながらも、俺はどうとう声をかけることができなかった。

こみ上げるものを抑えるのに必死だったからだろうか。あるいは、無惨に嗚れた声に老いの残酷さを見たからだろうか。あるいは、年寄りのか弱い心を今さら騒がせることを怖れたのだろうか。

そのいずれも外れてはいなかったが、正確的に射ているわけでもなかった。

実を言えば、俺は着々と迫りくるものを怖れ、声を失っていたのだ。つまりは、自分がまだこの場所に生き長らえているにも関わらず、もはや誰も顧みる者のいなくなる日を怖れていた。時という容赦ない巨大な流れが、やがては全てを奪い去ってしまうという絶望の前に、言葉もなく、ただ立ち尽くしていたのだった。

六

(父さん、オレ、子供に父さんのこと話そうかどうか迷ってるんだ)

亮介がそう話したのは、何度目、いや何十度目の訪問の時だったろう。それはあいつの息子、つまり俺にとっては孫が六歳を迎えた年のことだった。もうある程度のことは理解できる年齢だから、と亮介は言った。

俺があちらの世界から消えたのが、亮介が六歳の時だ。多分にそれを意識してのことなのだろう。

「話さない方がいい」考えるまでもないことだ。俺は言下に否定した。

「お前の父親はお前が六歳だったあの日、ここの海で死んだんだ。そうしておくほうがいい。今さら、こんなところにお祖父ちゃんがいるなんて言われても、容易に理解できることじゃないさ」

(うん、そうかもしれない。でも……)

亮介を脅かすものの正体を、俺は百も承知していた。むしろ、怯えているのは俺のほうなのだ。

この世界においては捉えようがない時の流れは、亮介の訪れによって断片的に知ることが可能になった。しかし、それが何度も繰り返されるうち、刻々と近づいてくるもののあることを、俺は知った。

すでに父は他界している。母もこのところ入退院を繰り返している。やがては妻——結局一度も会いには来てくれないが——が、そして、亮介も……。

その後を訪れるものを思うと、心の底から震えが来た。

亮介は自らの子に、己が担ってきた役割を託そうとしているのだろう。だが、それはどこまで行けば終わりが見えるのか。

もし本当にこの世界に時間がなく、自分が年を取ることもないとすれば……子は孫に、孫は曾孫に……際限のない連鎖と終わることのない孤独。見たこともない孫や曾孫によって語られる、聞いたこともない異世界の物語。

いずれ終わらせなければならないのなら、たった一人の係累まで繋がりやを断とう。俺はいつからか、そう決めていた。

「人生にはいつか終わりがくるものさ。黙ってそれを受け入れようじゃないか」

そう考え始めたのは、いつの頃だったろう。ジョン・レノンの暗殺を聞かされた時か、あるいはもっと後のことだったか。いずれにしろ、終わりを迎える覚悟は決めておく必要を感じていた。

亮介はこちらの投げかけた言葉に答えることもなく、いつものようにいくつかの世間話を積み重ねて帰っていった。

*

待ち遠しい訪れが繰り返され、名残惜しい別れが幾度も告げられた。その間も自分には時間の経過がなく、向こうの世界にだけ時は流れて続けていた。

(それじゃ、帰るよ)

亮介の声は嗄れ、痰が絡んでゼイゼイという苦しそうな呼吸音が聞こえる。その日は終始そんな調子で、会話は弾まなかった。声の感じだけで言うなら、いつか聞いた年老いた父の年齢をはるかに越えていそうだった。

「うん、身体に気をつけて。また来てくれ」

いつもの癖で、つい言ってしまふ。

ほんの僅かな間があって、亮介は答えた。

(ああ、また来る)

亮介が患っているらしいことは、だいぶ前に気づいていた。前回の訪問からずいぶん時間が経ったことも、今日の日付を聞いて知った。家族に無理を言い、病を押してやってきたのだろう。恐らくこれが……。

不意に涙がこみ上げてきた。闇に感謝したいと思ったのは、ここに来て初めてのことだった。自分は声に涙がにじまぬよう、喉に力

を入れて呼びかけた。

「亮介」

(あ、ああ)

力のこもらぬ、いがらっぽい返事が返ってくる。

「長い間、ありがとう」

(いや、父さん。何もしてやれなかった……)

「そんなことはないさ。最高の息子だったよ。……さようなら」

もう一度その名を呼びたいという欲望を無理矢理押し殺して小さく呟くと、自分はこの世界に来て以来初めて、しっかりと目を閉じた。

目を見開いている時と寸分違わぬ暗闇が、そこにはあった。

ようやくゆっくりと眠れそうな気がした。

了